



210号

2016 / 1 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

新年明けましておめでとうございます



「女王谷のウェルカムセレモニー」

2009年10月 中国四川省カンゼ・チベット族自治州・丹巴にて 大川健三(中国四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問)

集落のお祭りで披露される歓迎の儀式的踊りです。ハダ(白色の2m位の布)を捧げ持ち、歓迎の意味を込めたお目出度い言葉「ザシデレ」を言いながら、うやうやしくゲストの首に掛けます。ハダは中国語の音訳「哈達」の発音で、当地のギャロンチベット族の発音はカダとかハタ等です。無地のハダが多いですが、神獣や経文を織りこんだハダも有ります。また通常白色のハダが使われますが、地位の高い僧侶等は黄色いハダを使います。

‘わんりい’ 1月号の目次は最終ページにあります

明けましておめでとうございます。

北京の人々は、1月1日に余り大きな意義を認めていないようです。ご存知のように、中国では、お正月を旧暦で祝います。旧暦の1月1日は春節と言い、今年は2月8日です。北京の人々にとって、この日までは新しい年は来ないので、去年のことを色々思い返しながらか、新しい年の準備をするのだそうです。

北京に住む私の友人は、去年は天候が不順だったと言います。日本と同じように、寒さの到来が遅れ、北京が冬らしくなったのは11月に入ってからだったそうです。そして又、其の頃に、今までで一番酷い空気汚染に見舞われたそうです。それは、日本の新聞やテレビでも報道されました。学校が休校になるほどの酷さだったと聞くと、9月に私たちが体験したきれいな青空は何だったのだろうと思ってしまう。

去年、私たちは9月14日に北京に到着して、19日に北京を発つまで、お天気はとてもよく、清々しい青空が広がっていました。10日ほど前の9月3日には、中国人民抗日・世界反ファシズム戦争勝利70周年記念式典が行われ、郊外の工場を操業停止にしたり、自動車の走行を制限したりして、空気の汚れを制御したと伝えられていたので、14日に空気がきれいなのは、その名残かと思いました。ところが後で聞くと、3日と14日の間にスポーツ大会があって、その時はもう空気が汚れていたそうなので、14日から続いた晴天は、自然が自力で展開したものだったと知りました。しかも、私たちが北京を発ったあと直ぐに空気汚染があったと聞きましたので、この晴天は、天から私たちへのプレゼントだったのだと思うことにしました。

そんな訳で、北京の空気汚染の話になると、「言われるほど酷くはない」と言うのが癖になっていました。しかし思い出してみると、友人が2、3年前に東京へ来たとき、3枚の写真を見せてくれたことがありました。その写真の1枚は、私が北京で

暮らしたマンションの窓から外を撮ったもので、遠くにテレビ塔が見える懐かしい写真でした。2枚目も、同じ場所を撮ったもので、薄く霧がかかっていますが、テレビ塔はちゃんと見えているものでした。ところが3枚目は、同じところから撮影したそうですが、全面真っ白で、テレビ塔がある筈だと思いを凝らしてみても何も見えません。私が思うに、最近騒がれている大気汚染騒動は、すでにその頃から始まっていたのではないのでしょうか。

このような大気汚染は、地表付近の冷たい空気の上に暖かい空気が蓋のようにかぶさり（逆転層といいます）、地表付近の空気が上に逃げるのを妨げるのが原因で起こるのだそうです。それで、こんな時は冬としては暖かいのです。昔は、自動車こそ少なかったけれど、集中暖房に石炭を使い、空気は今以上に汚れていたと考えられますが、このような現象は起こらず現在ほど大気汚染は酷くはならなかったようです。その代り、北京の冬はもっとずっと寒かったと思います。

ズボンを穿き慣れない私は、北京でも長めのスカートで過ごしていました。ある日、曇って風の強い日でしたが、用があったので王府井から西単まで行くつもりで、長安街を西に向かって歩きました。風の冷たさは、かなり厚着をしていたので気にならなかったのですが、地面から上ってくる冷気に耐えられなくなりました。西単まで歩くつもりでしたが、地下鉄の天安門東駅が見えた途端に、思わず地下への階段を降りて、地下鉄に2駅乗って西単へ行きました。東京では経験したことのない寒さでした。

そのあとすぐに、前門で中高年向けの衣服専門店に、ズボンを買って穿くようにしましたが、外出の度に足がしびれるような感じが続くので、一冬過ぎたところで、北京で冬を過ごすことは諦めて、半年だけ行くことに決めました。この話を友人にすると、今はそんなに寒い日は少ないと言います。地球温暖化は北京も例外ではないということでしょうか。

Jūn zǐ bù yōu bú jù
君 子 不 忧 不 懼

君子は憂えず懼れず

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



ある時、弟子の司馬牛が孔子に、君子について訊ねました。孔子は次のように答えています。「君子不忧不懼 (Jūn zǐ bù yōu bú jù) (君子は憂えず懼れず) <顔淵第十二>。君子はクヨクヨしたりビクビクしたりしないものだ、と。これを聞いた司馬牛は、その言葉の意味がよく理解できなかつたらしく、更に訊き返しています。「不忧不懼、斯谓之君子已乎? (Bù yōu bú jù, sī wèi zhī jūn zǐ yǐ hū?) (憂えず懼れず、斯れ之を君子と謂うか)。クヨクヨしない、ビクビクしない、それだけで君子なのですか、と。これに対して孔子は「内省不疚夫何忧何懼! (Nèi xǐng bú jiù fú hé yōu hé jù!) (内に省みて疚しからざれば、夫れ何をか憂え何をか懼れん)。自分の胸に手を当てて考えてみて、疚しいところがなければ、何もクヨクヨしたりビクビクしたりすることはないではないか、と。

君子の定義については、『論語』のあらゆるところで語られていますが、それらを総合すれば、指導者としての人格を備えた人ということになります。「君子は器ならず」「君子は和して同ぜず」と言うのもその一例です。しかし司馬牛に対しては、そのような言い方はしていない。ただ「君子は憂えず懼れず」と説いているだけです。もの足りなく思った司馬牛が、「それだけで君子なのですか」と訊き返したのも当然と言えば当然でしょう。

またある時、司馬牛は仁について、やはり孔子に訊ねています。すると孔子は次のように答えます。「仁者其言也訥 (Rén zhě qí yán yě nèn) (仁者は其の言や訥なり) <顔淵第十二>。仁者はとかく口が重くなるものだ、と。訥には「口が重い」

という意味があります。ここでも司馬牛は「其言也訥、斯谓之仁已乎? (Qí yán yě nèn, sī wèi zhī rén yǐ hū?) (その言や訥、斯れ之を仁と謂うか)。口が重い、ただそれだけで仁ですか、と問い返しています。孔子の答えはこうでした。「为之难、言之得无訥乎 (Wéi zhī nán, yán zhī dé wú nèn hū!) (これを為すこと難し。之を言うこと訥無きを得んや)。仁の心を実行に移すことは容易でない。だから仁者の口が重くなるのも当然ではないか、と。

此の二件のやり取りから、孔子の真意らしきものを読み取ることができそうです。

司馬牛は『論語』に三回登場しています。これで見ると、真面目ではあるが、必ずしも優秀な人物とは言えない。そればかりか、臆病で愚痴っぽく、おまけに口が軽い。指導者としては不適格としか言いようがない。このような弟子に対して、君子の道、仁の心をどう説くか。訊かれた以上は答えないわけにはいかない。顔回や冉雍に説いたようなハイレベルな論法は通用しそうにない。かといって、自分で考えろと言って突き放すのも、司馬牛の性格から考えれば効果的とは思えない。そこで思いついたのは、自分の正しさに自信を持たせること。言葉の重みを自覚させること。この二点であったようです。これだけでは君子の道、仁の心にほど遠いかも知れないが、少なくとも司馬牛にとってはその第一歩になり得ると、孔子は判断したのでしょう。ここに孔子の心の温かさ、愛弟子への配慮の周到さを感じ取ることができます。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

昔、ある村に王という若者がいました。名前ははっきり分りませんので、とりあえず王生と呼びましょう。

王生は少年の頃から道術に憧れていました。20歳になった時、山東省にある労山に仙人が沢山いると耳にしたので、荷物をまとめて労山に向かいました。

山頂に登ると幽寂な雰囲気漂わせた道観(道教の寺院)が建っていました。門をくぐり中に入ると見ますと、一人の道士が敷物の上に座っています。道士の髪は真っ白で肩まで垂れ、見るからにとっても歳を取っているのですが、若者のような顔色と体をしており、どことなく神秘的な力を秘めているような感じがあります。

王生はこの道士の前にひれ伏して丁寧に挨拶の言葉を述べました。そして言葉を交わしてみると哲学的な道理や、大変霊妙な出来事などをいろいろ話してくれました。王生はすっかり感動し、この道士に弟子入りさせて欲しいと頼んでみました。

道士は、

「そこもどのような弱そうな身体では修業の苦勞に耐えられないだろう」

と言いました。王生は

「大丈夫です。是非、道術を身に付けられるように頑張ってみたいと思っております」

と答えました。道士は、「それではやってみるがよい」と承諾してくれました。

その日の夕方、道士は門人たちを集めて王生に挨拶をするように言いました。王生は道士の門人

たち、一人一人と挨拶を交わし、その日の夜から道観で泊まることにしました。

翌朝、夜が明けると、道士は王生を呼んで、重い斧を一つ与えると、門人たちと一緒に薪を取ってくるよう命じました。王生は恭しくその命令に従いました。

そして、その翌日も、また翌々日も同様に薪を取りに行かされました。

「明日からは秘術を教えてくださいのだから」と彼は思って頑張っていました。しかし、その後の一週間も、半月も同じことの繰り返しでした。「もう一息、我慢してみよう」王生は自分を励まし、歯を食いしばって毎朝のように薪を取りに行き続けました。しかし、そのまま一か

月が経ちましたが、道士は何も教えてくれる様子はありませんでした。王生は、手も足もマメだらけになり、その痛みは耐え難く、明日には家に帰ろうと毎晩のように心の中で思うようになりました。」

このように過ごしていたある夜、外から道観に帰ると、師の道士が二人の客と酒を飲んでいました。日はとっぷり暮れていたのですが、室内は灯火を灯さず何やら不思議な雰囲気が感じられました。王生は窓越しにこっそりその様子を見ていました。

すると、道士はハサミで一枚の紙を鏡のように丸く切り、ペタッと壁に貼り付けました。それはまるで月そのもののように見えました。そしてしばらくすると壁に貼られた紙の月がまるで本当の月のように光を放ち始め、部屋の中は明るく照らされ、人間の髪の毛さえもはっきり見えるようでした。門人たちが用を言いつかって走り回っているのも



満柏 画

はっきり見えました。

客の一人が「今晚の月の素晴らしさを皆で思う存分楽しもうよ」と言うと、机の上の徳利を取って門人たちに渡し、「こころゆくまでたっぷり飲め。酔ってもかまわんぞ」と勧めました。

王生は、七、八人も部屋にいるのに、ただ一本の徳利では足りないだろうと疑っていました。しかし、徳利がみんなの手を何度も往復し、その度に盃に満々と酒が注がれるのですが、徳利の酒は全くなくなる様子です。門人達は皆満足そうに飲み続けていました。

他の客が「こんなに美しく輝く月の光を賜っているのだ。嫦娥でも呼ぼうではないか」と言うと、テーブルの上の箸を壁に貼った月に投げました。すると、一人の美女が月から現れ目の前に降りたちました。最初は小さな姿でしたが、徐々に普通の人間の大きさになりました。綺麗な衣服を身に着け、繊細な腰、端麗な顔立ちの、この世の女性には見られない美しさでした。そしてその女性は歌を歌いながら、軽やかに「霓裳羽衣の舞^{げいしょううい}注」を踊り始めましたが、その歌声は清らかに悠揚迫らず天空の果てまで響き渡るようでした。

「わたしは今仙界にいるのでしょうか、人間の世界に下りているのでしょうか。或いは月の宮殿に戻っているのでしょうか」

歌はそのように歌っているようです。

歌と踊りが終わると、女性はくるくると独楽のように回り、パッと机に飛び乗るとあっという間に箸に変わってしまいました。道士と客の三人が嬉しそうに大声で笑いました。

またもう一人の客が言いました。

「今日は本当に楽しかったのう、けれど、すっかり酔ってしまって歩けないほどじゃ。誰かわしを月の宮殿まで見送ってくれるかのう」

三人は席を立つと、壁の月に向かって歩み寄り、そのまま月の中へ入って行きました。月の中でも三人は腰をおろして飲み続け、まるで丸い鏡に映っているように三人の鬚も眉毛をもはっきり見て

とれました。

やがて壁の月の明かるさががだんだんと暗くなってゆき、門人たちが灯りを灯すと客の姿はなく道士が一人で座っているだけでした。しかし、テーブルには料理なども残っており、壁には紙の月がまだ鏡のように貼り付けられたままでした。

道士は門人たちに訊きました。

「十分飲んだかい」

「はい、たっぷりいただきました」

「満足したなら、早く休もう。明日の朝は薪取りに行かねばならぬ」

門人達は各自の部屋に戻って行きました。

この成り行きを一部始終見た王生は、羨ましく思い家に帰る考えを止めました。そしてさらに一か月が経ちました。けれども、道士は相変わらず道術を教えることはなく、薪を取りに行かせるばかりでした。王生は手足の豆の痛みが辛くてとうとう我慢出来なくなり、心を決めて道士に別れの挨拶をしました。

「私は遠いところからはるばる仙術を習いに参りました。そして、ありがたいことに先生に弟子入りさせて頂きました。それから既に二、三か月が経ちました。長生の術を身につけることができなくても、簡単な術がなにか習得できれば、はるばる教えを求めてきた甲斐があります。けれども、先生のもとで毎日薪を取りに行っただけでは、家に帰って家族にどう説明すればいいのか悩んでいます」

道士は笑いました。

「やっぱり最初にわしが言った通り、苦行を辛抱できなかったのう。明日朝、誰かにお前を見送らせよう」

王生は言いました。

「先生に感謝申し上げます。けれど、私は長い間お仕えいたしましたので、せめてその褒美として何かささやかな術を教えて下されば、ここまで来た甲斐があると思います」

「では、何を習いたいと思っているのじゃ」

「先生が歩かれる時に、屋根や壁などがあっても

そのまま真っすぐに壁を通り抜けて行きます。私はいつもそれを羨ましく思っておりました。お願いできればその術を教えてくださいませんか」

道士は笑って承諾しました。そしてその秘訣を教えた後、呪文を唱えさせ壁をくぐりぬける練習をさせようとしたのですが、王生は壁の前に来ると立ち止まってしまいます。道士は

「さあ、入れ! 壁の中へ入ってみろ!」

しかし、王生は壁の中に突き進む勇気がなく、ぐずぐずして入ろうとしません。

「頭を伏せて、突っ込め! ためらうな!」

と道士は再三再四促しました。王生は思いきって、言われたとおり壁の数歩手前から目を閉じたまま突進して、すでに壁に達したと思いましたが、空を切って何の抵抗も感じません。しかし、目を開いてみると前に壁はなく、振り返ってみると、もう壁の外にいるではありませんか。

王生は大喜びで、庭に戻って先生にお礼を言いました。

先生は

「家に帰っても身を清く保つのじゃ。そうでないと、神通力は消えてしまうぞ」

と言い、王生に旅費を与えて帰らせました。

王生は家に着くと、「仙人に会ってきた。目の前に硬い壁があっても通り抜けられるぞ」と吹聴して回りました。それでも妻は王生のいう事を信じませんでした。王生はそれならばと、妻の前で教えられた通りに、呪文を唱えながら壁から数尺離れたところから勢いよく壁に向かって突進しました。しかし、壁に頭がぶつかりバタンと倒れてしまいました。妻が助け起こして見ると、額に大きな瘤が出来ていました。妻は笑ってからかいました。王生はきまり悪そうにしながらも道士を罵り始めました。「おいぼれ道士め! 悪い奴だ! まるで詐欺師だ!」

王生のこの話は笑い話になって今日まで伝わって来ました。

(終わり)

■注

霓裳羽衣の舞：唐代の宮廷楽踊り

大義名分

私の調べた諺・慣用句 46

三澤 統

私達は互いに何か不都合な事が発生し、相手にこちらの言い分を伝える必要が生じた場合、こちらの言い分に確かな根拠があるとしたら心強く、自信を持ってどのような相手でも説得できるのではないのでしょうか。そのような意味を持った中国の成語に「有恃无恐」があります。

辞書には次のように載っています。

▲ 小学館 中日辞典：

「有恃无恐 yǒu shì wú kǒng

後ろ盾があるので何ものも恐れない(怖いものなしである)」

ところで、同じ意味を持つ日本の慣用句は見つ

からなかったのですが、エピソードの内容を見ると、「大義名分」が意味的に近いように思います。

▲ 小学館 デジタル大辞泉：

「大義名分 ①人として、また臣として守るべき道義と節度。②行動のよりどころとなる道理。また、事を起こすにあたっての根拠。」

「有恃无恐」の出典は「左伝・俗公二十六年」です。

春秋時代、中原の覇者である齊¹⁾ 国の桓公の死後、息子の孝公が王位を継承しました。一方魯²⁾ 国は僖公26年(紀元前634年)の夏に国の存亡にかかわるほどの重大な災害に遭遇しました。その時、齊の孝公は魯国の不幸につけ込んで自ら大軍を率いて魯国討伐のために進発しました。魯の僖公はその事を知ったのですが、魯軍は齊軍に対抗する戦力がなかったため、戦いは避け、ある考え



満柏 画

を以て大夫の展喜に牛や羊、酒や食料を持たせて、齊軍に向けて派遣しました。

この時、齊の孝公の軍隊はまだ魯国の国境には侵入していませんでした。展喜は昼夜兼行で進み、齊と魯の境界で齊の孝公に出会いました。展喜は孝公に言いました。

「我魯国の君王は、大王(孝公)が自ら我が国に来られると聞きおよびましたので、貴軍を慰労するようにといわれ、私を派遣されました」

それを聞いて孝公は、

「お前たち魯国の者は、我々をそんなに怖れているのか？」

と威張って言いました。

展喜は弁舌の巧みな人物でしたので、卑屈にならず冷静な口調で孝公に言いました。

「両国の歴史に広い知識を持たない人たちならばあるいは怖れるかも知れませんが、しかし、我々魯国の君主と大臣達はいささかも怖れてはいません」

孝公はそれを聞いて軽蔑して言い放ちました。

「お前たちの国庫は空っぽで、人々は食べ物もないというのに、田畑には農作物も育たず青草さえも生えていないというではないか。にもかかわらずお前たちはなぜ怖れてはいないというのか？」

展喜には成算があったので、落ち着いてゆっく

りと言いました。

「我々は周国の成王の遺命を抛り所としているのです。以前、我が魯国の祖先の周公と齊国の祖先の姜公は共に一致団結して周国の成王を補佐し、寝食を忘れて周国を治めたので、成王は終に天下の統治を成し遂げたのです。成王は二人に非常に感激し、周公と姜公の二人に友好の同盟を誓わせ、子子孫孫まで両国が友好を保ち、互いに侵害しないようにと言いました。このことは記録によっても調べることが出来るのです。我々の祖先はこのように友好的であったのですから大王がどうして軽々しく祖先の盟約を廃棄し、魯国に侵攻なさるでしょうか？我々はこの時の友好を信じているからこそ、怖れないのです」

孝公はこの話を聞いて展喜の話は正にその通りだと思いましたが、討伐を止め軍を引き上げました。

■注記

1) 齊(せい、紀元前1046年～紀元前386年)

周の軍師・太公望(姜大公)によって建国され、周代及び春秋時代から戦国時代の初頭まで、現在の山東省東北部から河北省南部にかけて版図を有した。戦国七雄の一つ。

2) 魯(ろ、紀元前1055年～紀元前249年)

周の摂政を務めた周公旦の子・伯禽によって建国された。周代の列国の一つとして数えられ、孔子の生国としても知られる。

*注記1)、2)とも小学館 中日電子辞典より

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又'わんりい'の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、簡単なお感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

元寇と鷹島 (その4)

寺西 俊英

このシリーズは、いよいよ弘安の役である。1281年(弘安4年)、元軍は4400艘の世界史上例を見ない規模の艦隊で日本に攻め寄せてきた。この4400という数字がいかに途方もない数字かを見てみよう。単純比較は勿論できないが、少し時代が下がった1588年の「アルマダの海戦」はスペインとイギリスの有名な海戦である。当時「無敵艦隊」の異名がついたスペインの船団はイギリスに敗れたのであるが、この時の無敵艦隊は約130艘であった。その時より300年前の戦いであり、船の大きさや構造が違うとはいえ元軍の大船団の光景を見た武士や庶民の驚愕は想像に余りある。



では「弘安の役」を見ていこう。4400艘には14万人～15万7千人の戦闘員が乗り込んでいた。つまり1艘あたり32人～36人という計算になる。これを迎え撃つ日本軍は6万5千人くらいとある。普通に戦えば火器の性能は劣り戦闘員の数も少ない日本側に勝ち目はないと思うが、日本の勝利に終わったのは「神風」と呼ばれた台風が襲来したため元のかんりの軍船が沈没し、多数が水死や戦死したためであるといわれている。

しかし比較的短期間で終わった文永の役に比べ、弘安の役は約3か月間続いたのである。なぜ戦いが3か月も続いたのかを見て行くと、元軍にとって手違いや予想外の出来事が続く一方で、日本側は文永の役を受け体制の立て直しを図り、御家人の統率も図れるようになっており、また防御のための防塁造りも大いに役立っていたことが分かる。

ここで戦いの終結までを見て行く前にお断りしておくことがある。それはこれから記述する<月、日>は当時の資料などに記載されている「旧暦」としたい。本来ならば分かりやすく「新暦」で記述したいが新暦に置き換えるには複雑で私の手に負えな



海ノ中道と志賀島。(ウィキペディアより転載)

い。新暦と旧暦とはかなりのズレがあり、例えば今年の1月1日(元旦)は旧暦では2月8日(春節)である。2015年の春節は2月19日であった。また旧暦には何年かに一度、1年のうちに同じ月が2度ある、つまり13か月の年がある。これは太陰暦と太陽暦の整合を図るためである。私が大連で勤務していた時も5月が2回ある年があり、不思議に思ったものだ。

弘安の役は台風が来て元軍が退却して終結する日は、ネットでは新暦の8月29日となっており、旧暦では「閏7月7日」となっている。閏7月とは、7月と8月の間に挿入された月である。この様に複雑なので、弘安の役における一つ一つの出来事は申し訳ないが旧暦で表示させていただきたい。

さて、元軍は文永の役で懲りるところか、大艦隊で有無を言わせず日本を踏みつづそうと考えたように思われる。別表を見ていただくと、二つの役規模が大きく異なることが分かる。元の基本的な戦略は、「東路軍」と「江南軍」が北と南の軍港から進発し6月中旬に壱岐沖で合流した後、一気に博多湾から上陸し大宰府に攻め込むと言うものである。では、なぜ日本の幕府軍が蒙古軍に対して勝利を得たのか、その足跡を辿ってみたい。

まず東路軍は5月3日に文永の役の時と同じ合浦から出港した。東路軍の司令官は忻都^{ヒンドウ}という名の

ければならなくなった。台風が来襲したのは3日後の7月30日の夜半である。元軍の艦隊は軍船同士が衝突し、砕け散ったものが多数に上ったという。

東路軍も台風の被害を受けたが、損害は比較的少なかったらしい。江南軍の船に比べて堅牢であったようだ。鷹島周辺の海底で見つかっている陶磁器などの遺物は殆ど江南地方で作られたものという。弘安の役は台風が静まった後も鷹島の土塁などに残っていた多数の元の兵士への掃討戦が繰り広げられた。

この戦いで帰還した兵士を見ると、歴史書によりバラつきがあるが全元軍の1割～4割と幅がある。元軍は14万人～15万7千人といわれているから、1万4千人から6万3千人しか帰還できなかったということになる。元は海軍力のかなりの部分を失い、兵士も10万人前後は生きて帰れなかったこと

になる。

歴史に「もしも」はないというが、台風がもしも来なかった場合はどうなっていたであろうか。この戦いには間に合わなかったが、日本軍は6万の援軍が九州を目指していたというから、最終的には撃退したのではないかと考えるが如何であろうか。

実はフビライは2回の日本侵攻で大損害を受け、撤退という結果にも拘わらず3回目の日本侵略を企てた。よほどアジアで唯一意のままに従わぬ東方の小さな国にプライドを傷つけられ、はらわたが煮えくり返っていたのであろう。 (続く)

◆参考文献

松本忠親著：「私と元寇」(2012)，私家版。

松本忠親著：「日本漢詩に詠まれた元寇」(2013)，私家版。
その他インターネットにて収集。



詩人^{いんせりん}尹世霖の童詩の世界①9

金子總子・訳

xiǎo kǒng què

小孔雀

yī kē shí liú shù ,
一棵石榴树，

yī tuán lǜ bō tāo 。
一团绿波涛。

yī duǒ shí liú huā
一朵石榴花

yī shù hóng huǒ miáo ,
一束红火苗，

duǒ duǒ shí liú huā ,
朵朵石榴花，

xiàng zhe lán tiān shāo 。
向着蓝天烧。



小さい孔雀

なんと美しい

五色の 貝殻

なんと美しい

金色の 巻貝

拾って帰り

小さい一羽の孔雀を作って

先生の 机の上に 置きました

わたしの 素敵な お願いを

先生の 胸の中に 飛びこませるの



Emme・オープンボイス 合同コンサート 参加

於:高田馬場・四谷天窓 Comfort(コンフォート) 2015年12月5日(土)

'わりい'の仲間たちの講座の一つである「日本の歌を美しく歌おう!ボイス・トレの会」仲間の有志10名が、Emme講師の、「オープンボイス 合同コンサート」へ参加し、「心の瞳」(作詩:荒木とよひさ/作曲:三木たかし)を歌った。

この歌は、日本航空墜落事故直前に坂本九の持ち歌としてレコーディングされたが、墜落機に坂本九が搭乗していたため、コンサートなど公の場で歌われる機会を失くした。その後合唱曲に編曲され、温かな愛の歌として広く歌い継がれてきた。'わりい'メンバー世代にふさわしい内容の歌といえるが、歌詞がなかなかきちんと覚えられず、練習の度に笑いが起こった。

ひばりが丘から参加のグループの男性が、発表の前に一言、「僕の人生で人前で歌う日が来るとは思っていなかった」とのことだが、正に私自身もである。

当日は、Emme講師指導の、各地のグループや短大



「心の瞳」を発表するメンバーたち

生仲間のセッションのほか、個人での発表の機会でもあった。日頃顔を合わせる事はないながら、和気あいあいと日ごろの訓練の成果を互いに楽しんだ。

(報告:田井)

町田市市民協働フェスティバル「第9回まちカフェ!」参加

於:町田市役所1F~3F 2015年12月6日(日)9:30~16:30

市民協働フェスティバル「まちカフェ!」は、町田市を中心に活動している市民や地域貢献団体の方たちと共につくる、『市民協働』をテーマにしたお祭りで、第9回の昨年は、環境、文化、福祉、子育て、国際、その他に関わる86団体が出展した。

2011年、2012年に町田市つながり広がる地域支援事業に参加した縁で、以来、町田市役所・市民部市民協働推進課ロビーに若干部数を置かせて頂いている会報'わりい'が、まちカフェ!実行委員会の目に留まり「まちカフェ!」への参加を勧誘された。



準備完了の'わりい'のブース。今年発行の会報'わりい'と活動のチラシを展示して活動を紹介した。

初めての参加だったが、町田市で活発に活動を展開している多数の団体の存在を知り大いに刺激を受けた。初めての参加で様子が分からず十分とはいえないまでも、それらの団体となにがしかの交流も果たせた有意義な参加だったかと思っている。(報告:田井)



会場1階中央、3階までの吹き抜けの広々としたステージでは、「車いすダンス」、「阿波踊り」、「よさこい踊り」、「太極拳の演舞」に「創作和太鼓」と盛りだくさんのプログラムが披露された。この写真撮影の時は、な、なんと屋内でサッカー?子供たちが嬉々として会場を駆け巡った。後で訊いたら、フットサルという、サッカーに似て異なる屋内球技だそう。

応県木塔

鄧仁有

皆様、これから応県木塔にご案内します。

この塔は1036年に建立されました。正式名称は仏宮寺釈迦塔です。

当時は遼^注の時代で、応県は西京行政府(西京道)の一部でした。いったい何のために中心都市・京城(大同)から遠く離れた応県に巨大な塔を建てたのでしょうか? 民間の伝承と文献の記載によると3つのことが考えられます。

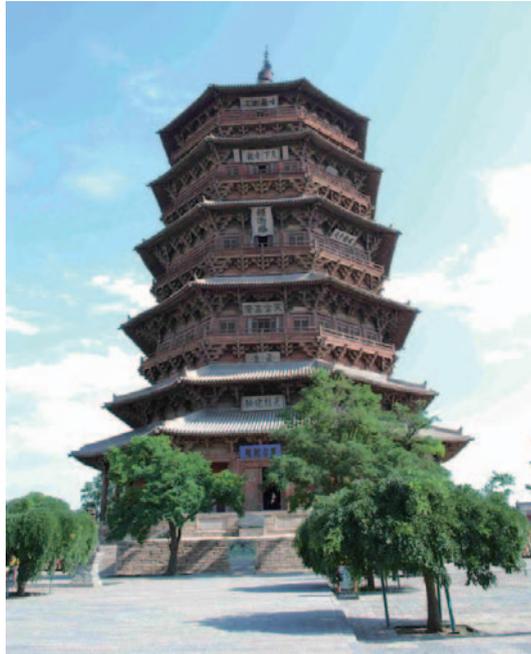
まず一つには仏像を礼拝することです。遼の支配者は仏教を厚く信仰していたので、各地に多くの寺院を建立しました。

二つ目は敵情を偵察するためです。当時、遼と宋は頻りに戦争があり、応州はその戦闘地区にあたっています。ここに高い塔を建てれば、間違いなく軍事の目的が果たせます。今、塔にある「金城戎楼」という扁額がその証拠です。戎^{じゅう}という文字は戦争の意味です。

もう一つは遠景を見晴らすためです。遼の興宗帝



応県木塔のある仏宮寺 (Googleパノラミオから転載)



応県木塔。正式名称は仏宮寺釈迦塔
(Googleパノラミオから転載)

の肅皇后は応州出身でした。興宗帝に深く寵愛された皇后は、高い塔を建て、塔に登って故郷の風景を見晴らすことが楽しみではなかったでしょうか。文献の記載によると、この塔は肅皇后の実家の出資により建てられたものです。

この木造の塔は高さ4mの土台の上に67mの塔が建てられ、塔の底の直径は30m、平面八角形を呈しています。

この木塔の設計全般は科学的で厳密であり、完璧な構造を持ち、外からは五層に見えるが、一層ごとに暗層(中二階)が付き、実際は九層です。何故九層になっているのでしょうか? 九という数字は皇室の最高位を意味するものです。九は密教でも重要な意味を持っていて、例えば、8体の仏陀が大日如来を囲んでいるとかです。各層の外側には24本の柱、中には8本の柱が建っています。その間に多くの斜めの支え木、梁、角材などがあり、異なる方向に向かった複雑な構造を成しています。

この木塔はこれまで950年の長い年月の中で数十回の大地震に耐えてきました。史書によると、木塔ができてから300年後にマグニチュード6.5の地震が起き、余震が7日間続き、他の建物は全部破壊したのに、この木塔だけは残りました。

1926年閻錫山と馮玉祥の軍閥間の戦争で、木塔は200発もの砲撃を受けても破壊されなかったのです。この木塔の構造は科学的な設計に基づいて作られています。例えば、耐震力が強いのは現代建築にも見られる多くの手段が用いられています。次に、柔軟性を持つ材料を使い、外部か



塔内第二層の塑像 (ウィキペディアから転載)

らの強い衝撃があっても変形しにくくなっています。また、ある程度の原型を回復する能力を持っています。しかも組み立て構造での各節目には、いずれも凸部と凹部の結合方式を利用し、一定の柔軟性をもたせていることです。木塔の外からは見えない四つの所謂暗層は塔全体の構造を強化し、多くの料拱(枅形)は弾力を持ち、外部からの強い圧力を受けてもそれを軽く出来る非常に良い耐震性能がそなわっています。

専門家によるとこの塔は54種類、240組それぞれ違った様式の料拱を使っているのです、「料拱の博物館」とも呼ばれています。天辺には八角形で尖った鉄刹を立ててあります。この鉄刹は仏教の世界を象徴しています。蓮の花型の台座、相輪(塔の崇高さを表す)、火焰と宝瓶、宝珠からなります。

この塔が落雷にあっても被害を受けないのは、この鉄刹が装飾だけではなく、避雷針の役目を果たしているからです。また塔の周りの8本の鎖は雷による電流を地下に導くのです。以上のような避雷装置があったからこそ、木塔はこれまで持ちこたえて来たのです。

塔の五層はそれぞれ別個の寺院としての機能をもっており、三つの同心円の構造になっています。中心部は神聖な内層と呼ばれ、仏像数体が安置されています。その外側は信者たちがお経を唱えながら歩き回れる空間となっています。そして、全体を取り囲むように欄干がめぐらされています。この欄干からは応県の田園風景を見下ろすことが出

来ます。

一階正面には、高さ11mの遼代の色彩塑像のお釈迦様が祀られています。このお釈迦様は説法印の動作をしています。特徴的なのは緑色の髭と耳飾りをつけていることです。当時の契丹族の男子は髭を生やすのが流行だったそうですが、何故緑色になっているのか、一つの謎です。また、仏像の頭上には八角形の精巧な天井があります。周りの壁には高さが8mもある6枚の仏像や脇侍菩薩の壁画があり、門の両側には金剛や天王、弟子などの壁画があり、描き方が形式にこだわらず生き生きして真に迫っています。南、北の門の上には契丹族の民族衣装をつけた6体の供養人が描かれています。

1974年、第四層の仏像を修繕した時に、その内部から貴重な経文が発見されました。特に「遼代彩印」は我が国の印刷史を輝かせるもので、経巻の長さは30m以上にも達し、中国でも貴重なものです。そして、弟子たちに取り囲まれた仏陀の姿が描かれたものは、中国の彩色印刷の最も古い傑作です。

二階にはお釈迦様と文殊、普賢の脇侍菩薩二体が祀られています。

三階には八角形の須弥壇上に四方仏が祀られています。東方の阿閼仏、西方の阿弥陀仏、南方の宝生仏、北方の成就仏です。またこの三階には「釈迦塔」と描かれた額がかかっています。この額は優れた書というだけではなく、塔の修復の年代などが記録してありますから、この塔を研究する得難い資料となっています。

■注

遼：916年～1125年まで、内モンゴルを中心に東は渤海までの中国の北辺を支配した契丹人耶律氏の征服王朝。

国際交流員として2004年から2年間、青森県に來日した鄧仁有さん。その後帰国され、山西省太原市にある旅游学院の日本語ガイド養成コースで教鞭をとられています。鄧さんが執筆した日本語ガイド資格試験用テキストから、山西省の名所旧跡をご紹介します。

東西文明の比較 (1)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

地球は丸いのに、なぜ争いが絶えないのか。「平和」。これは人類永遠のテーマです。私は今頃になって、このテーマに気がつきました。その手始めに「文明とは？」を考えました。そのきっかけは、1996年に出版されたサミュエル・ハンティントンによる「文明の衝突(日本語版:集英社)」を読んだことです。米ソ冷戦というイデオロギーの対立が終わり、これからは「文明と文明の衝突」が対立軸になるという論です。そしてもうひとつの影響は、私の大好きな塩野七生さんのローマに関する著作です。

丸い地球に、奇しくも同じころ2大文明が誕生したことも興味をそそられました。パクス・ローマナは「ローマによる平和」の意味ですが、パクス・ブリタニカ、パクス・アメリカナが続き、これらが渾然となっていていつのまにか「文明とは？」が「文明とは覇権なり」になってしまいました。今日の争いはココ(覇権争い)に大きな原因があると考える昨今です。

東西に出現した世界帝国

伝承によれば、ローマは紀元前753年に建国された。史実によれば、ローマは紀元前270年にイタリア半島を統一したとある。地中海世界ではザマの戦いで、スキピオ(BC236～BC183年頃、共和政ローマ期の軍人、政治家)の率いるローマ軍がハンニバル(BC247～BC183年/BC182年、カルタゴの将軍)のカルタゴ軍を打ち破った。そのころユーラシア大陸の東では前221年、戦国時代に終止符を打ち秦が統一帝国を打ち立てた。始皇帝は、郡県制を採用し、度量衡・文字・貨幣などを統一した。やがて始皇帝の死後、秦は内乱に陥り滅ん

だ。その混乱の中から、楚の項羽と漢の劉邦が戦って漢が勝利し、漢帝国が誕生。前202年のことだ。

奇しくも同じころ、ユーラシア大陸の東と西「中国文明圏」と「地中海文明圏」が出現した。そのころ日本はどのような時代であったか。日本は弥生時代。中国や地中海と比べて農業が遅れていた。狩猟採集の対象である小動物や植物が日本列島には豊富にあったから、わざわざ農耕しなくとも不自由しなかった。豊かな土壌と水、温暖な気候に恵まれた日本列島は、文明に目覚めていなかった。

ローマの誕生、神話から史実へ

世界最高の傑作といわれるホメロスの叙事詩「イーリアス」によれば、ギリシャ軍の武将オデュッセウスが考案した「トロイの木馬」によりトロイは落城(紀元前13世紀頃)した。トロイ王の婿アイネイアス(女神ヴィーナスと人間の間に来た子)は老いた父と息子とわずか数人の人々を引き連れ、脱出に成功した。この一行がたどり着いたのがローマ近くの海岸。そこからローマが始まる。アイネイアスの子孫と伝えられるロムルスとレムスという双子が生まれた。やがて王位争いが起こり、ロムルスが勝利して初代王になる。前753年4月とされる。ローマの名はロムルスから来た。

やがて神話伝承を離れて「歴史の時代」になる。この時代のイタリア半島は、中部から北はエトルリア人が支配し、南部はギリシャ人の支配下にあった。エトルリア人の歴史は未だに不明確だが、鉄器の製造法を知っていた。又南部のギリシャ人との経済交流もあったようだ。古代エトルリアは12の都市国家による連邦制をとっていた。しかし、各都市国家は独立志向が強く、連帯感もなく、やがてそれが致命傷となる。

一方ギリシャは耕作地に恵まれないため早くから植民地を求めて地中海沿岸へ進出していた。東は黒海沿岸、西はフランスからスペインにまで達していた。イタリア半島ではナポリをはじめターラント、シチリア島のメッシーナ、シラクサ、アグリジェント等々。ギリシャの都市国家もお互いの連帯意識は

なかった。ローマという地はこうした先進民族の築いた都市国家の中間、いわば列強都市国家の谷間にできた。

ロムルスのローマ

ローマは18歳のロムルス¹⁾と3000人のラテン人によって建国された。国政を三つの機関に分けた。「王・元老院・市民集会」である。王は宗教催事と軍事の最高責任者であり、市民集会で選ばれた。王に助言を与えるのは100名の元老院。市民集会はローマ市民全員で構成された。王を始めとする政府の役人を選ぶ役割を持つ。元老院の助言を得て王が立案した政策の認否を問うのも市民集会の役目。39年に及ぶロムルスからヌマ²⁾に引き継がれた。

ヌマはかつてロムルス王が征服したサビーニ族の出身だ。ローマの王位は終身だが世襲ではない。いわば「終身大統領」がふさわしい。ヌマの業績は「法と習慣の改善」であった。「法」とは秩序の確立をいい、人間であるための「礼節」を教え、自らの力の限界を知ると同時に、それを越える存在への怖れを教えたのである。

ヌマは防衛以外の戦闘は不要と考え、農業と牧畜を盛んにした。大工・鉄工・染色・陶工などの職能別団体を結成した。これらの施策はローマ人とサビーニ人の融和のためと考えられる。ヌマの治世で最も特筆すべきは、「宗教の改革」だ。ローマ人は多くの神々を持っていたが、ヌマはそれらを整理して、神々を敬うことの大切さを教えた。ローマ人は神に「守護」を求めた。ローマ人の神々はユピテル神(神々の王)、その妻のユノー女神、ヴェヌス女神(美と愛を司る)、ディアナ女神(狩の女神)、アポロ(学芸)、アテネ(知の女神)、マルス(戦いの神)、ヤヌス神など。農業はケレス女神、葡萄酒作りはバッカス、経済発展はメルクリウス、病気にはアスクレピオス等。ローマ人は多民族の神々も積極的に取り込んだ。

ローマ帝国の衰亡

繁栄はある臨界点まで達すると、衰退に転じる。ローマの繁栄の第一の要因は、当時の地中海世界が5000万人を養うだけの豊かさをもっていたこと。

といっても余剰農産物を出せる地域は、ナイルデルタ、クレタ島、チュニジア、シチリアなど、限られていた。そのため地中海世界は、余剰農産物を巡る争奪戦争が耐えることが無かった。カエサル(BC100～BC44年)は余剰農産物の適正配分することを試みて地中海世界をひとつの領域国家とし、地域ごとの政治システムを中央集権的な統治体制に改めようとした。

その志半ばでカエサルは暗殺されてしまうが、その遺志を継ぎアウグストゥス(BC63年9月23日～BC14年8月19日)によってローマ帝国の基礎が築かれ、以後300年にわたる繁栄を続けた。ローマ帝国が繁栄し、とりわけイタリア半島に住む人々が豊かになると、彼らは兵役を嫌うようになり、やがて国境警備は辺境の異民族が担うようになる。

帝国の国土が巨大化すると国境は拡大し、軍事力は分散する。国境紛争では異民族兵士は弱い。状況が劣勢になると、あっさり敵に寝返ってしまう。やがて軍隊が内部崩壊を起こし、ローマは次第に衰退する。

ローマ帝国の場合、その分岐点は2世紀はじめのトラヤヌス帝(在位98～117年)とハドリアヌス帝(在位117～138年)のころにあたる。トラヤヌス帝は領土拡大を目指して、ルーマニアからイラクあたりまで占領した。これを継いだハドリアヌス帝は、その広大な領地に振り回されることになる。次第に異民族のコントロールがきかなくなり、内政重視に切り替えるが間に合わなかった。メソポタミア遠征から帰国した兵士が疫病を持ち帰り、それが元で人口が激減した(2000万人死亡したといわれる)。

衰亡のメカニズム

文明は必ず滅びる。永久に発展を続ける文明は存在しない。「中国4000年」という言い方があるが、中国文明の長さを象徴したものであっても、中国文明が連綿とした連続性は無い。いくつもの民族が築いた文明が「交代して」続いたに過ぎない。

ひとつの文明が興り、栄え、消えるという文明の興亡はヒトを典型とする生物の生涯と似ている。

シュメール(メソポタミヤ南部地域。初期のメソポタミヤ文明を指す)のように隆盛の後、急速に衰退した文明はまれだ。しかし、シュメールの例は灌漑農業という強引な生産手段が「土地の荒廃」を招いたという特異な例である。文明衰亡のメカニズムは、敵国に攻められて滅びたという例を除けば、「繁栄の中」に見出せる。

ここで唐突ですが…「COP21合意」について

中国の文明についてもっと述べようと思いましたが、12月12日の気候変動パリ会議で「地球温暖化阻止」のための歴史的的一步を踏み出したという情報に目を転じます。

パリ会議は、世界196か国・地域が参加しました。地球の危機に際して、全ての国が心をひとつにできたのです。文明・文化・貧富・宗教・民族…あらゆる違いを超越して人類が一体化する可能性があることを感じました。感動の瞬間ではないでしょうか。

(中国文明は次回にします)

■注

1) **ロムルス** : (Romulus、BC771 ~ BC717年) は、ローマの建国神話に登場するローマの建設者で、伝説上の王政ローマ建国の初代王である。ロームルスとも呼ばれる。ローマの最初の国王として元老院や軍団など古代ローマの根幹を整備した。周辺の都市国家を征服して国を豊かにしたが、同時に強権的な王として知られる。
(ウィキペディア)

2) **ヌマ・ポンピリウス** : (Numa Pompilius、BC750 ~ BC673年) は、王政ローマにおける第2代の王。一般的には伝説上の存在である。戦争に次ぐ戦争でローマを拡大した初代王ロムルスとは異なり、43年におよぶ治世中に一度も戦争をせずに内政を充実させたとされている。
(ウィキペディア)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

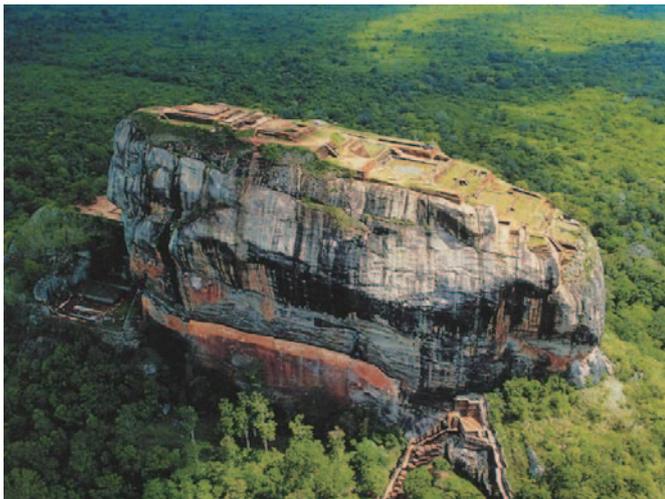
日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。



中国四川省で四姑娘山自然保護区管理局・特別顧問として活躍の写真家大川健三氏より、「わんりい」の皆様へ年賀状を頂きました。明け染める四姑娘山をご覧ください、共に今年が様々な地球上のトラブルの解決に向けて歩み出せる年になることを祈りたいと思います。

2015年3月、シーギリヤロックを訪ねてその壮大さに驚いた。緑と対照的な赤褐色の岩肌は、空に向かって切り立っている。「あれ？」スリランカにもマチュピチュのような世界が存在したのかと思った。

25年前、初めて上った岩山の洞窟壁に描かれたシーギリヤ・レディの画面に触れた日も、「あら？北インドで見た壁画も同じ構図だったっけ…」と思い起こした。地域的に見て、経済や文化の交流があったことが窺える。昔は500体ものフレスコ画が描かれていたというが、今では18体位しか残っていない。



シーギリヤロック空撮 (シンハラ語版ウィキペディアより)



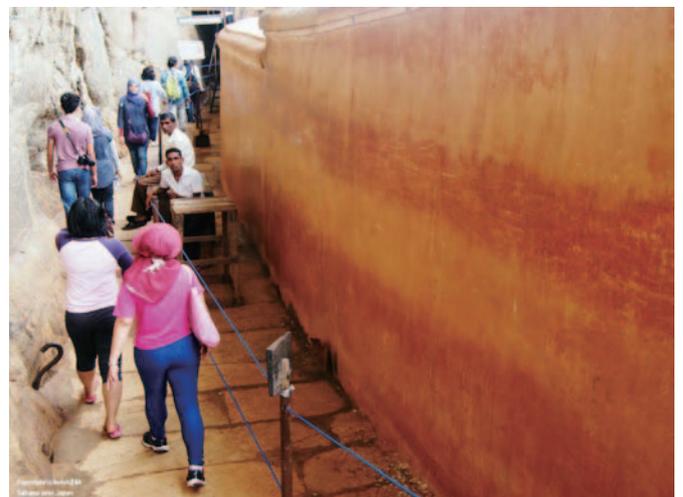
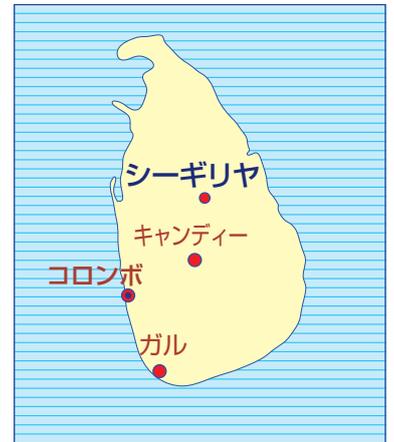
王のプール 王が沐浴していたといわれる、シーギリヤロック頂上につくられたプールの跡。

シーギリヤの物語は、異母兄弟の王位の奪い合いであり、所詮、それは人間の我欲と孤独との戦いである。時代は5世紀後半、僅か11年間の宮中宮殿の生活には仏教の因果応報の教えを見ることができる。

👑シーギリヤの悲劇

スリランカ史を繙くと、紀元477年ダートゥセーナ王の長男・カーシャパが王位を奪い父を殺害。478年、カーシャパ王がシーギリヤに遷都し宮殿建立。495年、カーシャパ王の弟モッガラナーの侵攻でシーギリヤは陥落する。その後、モッガラナーは、シーギリヤの王宮を仏教僧に寄進し、元の都・アヌラーダブラに首都を戻したとある。

スリランカの遺跡として世界遺産に登録されていることもさることながら、人を惹きつけるのは上記の悲劇が背景にあることだと思う。このシーギリヤロックは、古代には仏教僧たちの修業



ミラー・ウォール シーギリヤ・レディの下の人工の壁。ピカピカに磨かれ鏡のように人の姿が映ったといわれる。

道場であった。

重複するが、スリランカに伝えられる物語に触れる。実父・ダートゥセーナ王は、アヌラーダブラを統治していた。幾度となくタミル人の侵略を平定し、広大な貯水池を建造するなど聡明な王であった。この王と平民の側室との間にできた長男がカーシャパであり、弟の母親は王族の血筋を引く正室であった。それ故に、カーシャパは王位を弟に奪われることを非常に恐れ、実父を監禁し王位を剥奪した。財産を全て要求したが断られた。怒りに狂ったカーシャパは実父を殺害した。弟はインドに亡命した。しかし、難を免れた弟からの報復を恐れ、カーシャパはアヌラーダブラからシーギリヤに都を移し、岩山に要塞のような王宮を築いた。しかし、父の死後、18年目に、インドに亡命していた弟が兵を率いてシーギリヤに攻め入り、兄を追い詰めた。カーシャパは自害しその人生を終えた。

この宮殿建立は、7年もの年月を要したと伝えられているのに実に短命の王都であった。石で作られた王座は立派であったが、そこに座しながら、いつ、弟が攻めてくるのかと襲来を怖れていたのかもしれない。人間の欲望は限りなく、形を変えて今日でも繰り返される。仏の教え「因果応報」は理にかなったことだと思う。人間、道に外れた行いは慎むべきであると、シーギリヤの悲劇は語りかけている。

シーギリヤ・レディ

スリランカを訪れる人々で、このシーギリヤ・レディを観たいと思う人が少なくない。私は期待を大にして、25年前に必死で850段を上った。下を見ると落ちそうで怖い気持であったけれど、やっとの思いで壁画と対面した。ガイドブックでは、明るい色彩であったのに、実際にはほとんど色あせて見えた。雨嵐に吹きさらされたためであろうか、断崖絶壁の中腹の頂上寄りにあった

が、長い階段を一段一段苦労して上ってきた達成感があった。

カーシャパ王の後宮の女性たち…王妃、王女、侍女、側室らしい黄金色に輝く女性は、それぞれに違った花籠に華を載せたり、華びらを手にしたり、華を運んだりしている。その女性たちの宝飾、衣装、髪型、豊満なバストや細いウエスト、妖艷な目と唇…これらは、王の目を楽しませたり、王に迎えられるのを待っているのではあるだろうか。

華は、インドの風俗として身体を飾る生花であったのが転じ、それを仏前に供えた。これを外して手で撒いたのが散華供養である。華びらを撒くのは仏様をお迎えするときの行である。王は女性と仏に心の癒しを求めていたのではないだろうか。或いは実父を殺害したの罪の意識から実父への鎮魂歌としたかったのではあるだろうか。

シーギリヤの謎

シーギリヤの空中宮殿は、角度を変えれば要塞王国である。1500年前にカーシャパ王によって造られた稀有な建築物である。200mもある高さの岩山に、誰も登って来られないような設計を考案した。あちらこちらにその仕掛けや怪しげな工夫もされ、一見何も無いようなところに落とし穴があったりする。タランガッレソーマシリ師



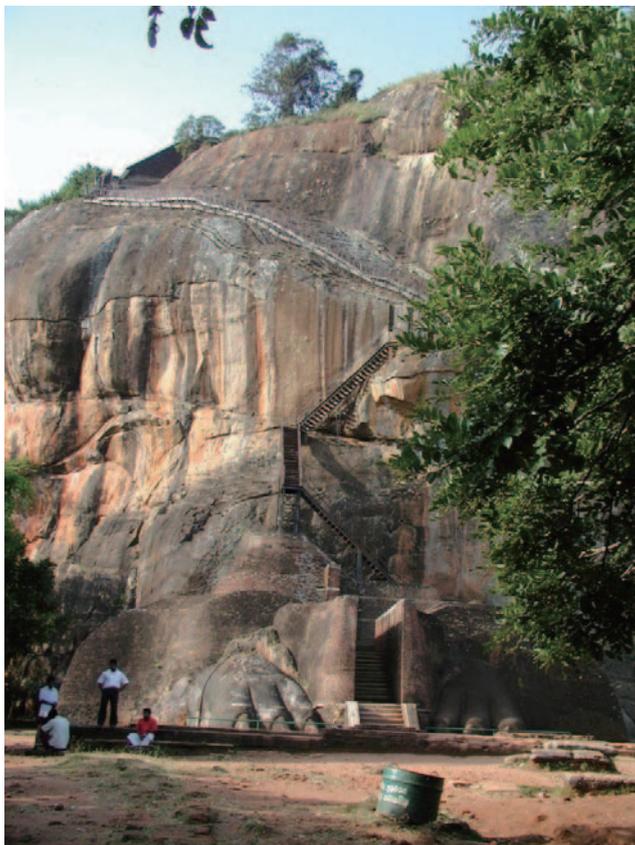
シーギリヤ・レディ シーギリヤロックの壁面に描かれた女性のフレスコ画の内一枚。かつては500人にも及ぶ女性が描かれていたと言われているが今は18体のみになった。描かれた女性たちが手にしている花は散華供養のための蓮華の花であろうか。

は「1853年に英国人が岩山の発掘作業していた2人がここを発見したんだよ。20世紀後半から世界に知れ渡るようになり観光に来る人が殺到するようになった。ジャングルに眠っていた宮殿からは5世紀のスリランカ美術と建築の集大成だといわれるほど、高いレベルのものが発見されたんだ」といわれた。

私が知っているだけでも、シーギリヤロックの麓には広い庭園があって噴水のように循環する小川や上下水道もあった。

その庭園を取り囲んで蓮の水路が造られ、へビ、ワニが住んでいて、そこに落ちれば人は戻って来なかったと聞いた。

頂上の沐浴場、見張り台跡などからは建築



ライオンの足と階段 シーギリヤロック頂上直下にある。ここから鉄製の急な階段を登って頂上に至る。

技術の高さが窺える。15000m²もあるという広い土地に王宮、妃たちの部屋の他、ダンスホールまで備わっていた。当時、それらを完成させた技術は、現在の専門家の研究対象となっている。

シーギリヤロックを登る途中の、ミラー・ウォール(鏡の回廊)と呼ばれる岩壁に書かれた685点の興亡物語の中の、詩文の一つをソーマシリ師が訳して下さった。

「黄金の宮殿 あの豪華な広間 贅沢に造られた調度類を並べ この荘

厳なる中庭 あの空に面した壁 全ては空行く霧のように消えていった」

※写真(「シーギリヤロック空撮」を除く)はGoogle社のPanoramio(パノラミオ)から転載。

フィリピン滞在記 ⑩---パンガシナン州ダグーパン市へ移動

為我井輝忠

昨年(2015年)10月に前年の契約満了で日本に帰国はしたものの、11月中旬に再度、日本語講師としての契約が更新になりフィリピンへ戻ることになった。2期目の今回は私の希望でパンガシナン州(Pangasinan)の州都・ダグーパン市(Dagupan City)へ赴任した。ダグーパンは前任地のサン・フェルナンドから南へ向かったマニラ方面へ2時間程行ったところにある、人口20万人の中都市である。今度はマニラに出るには時間が

短縮されて、5~6時間となり、かなり便利になりそうだと言ってもよいだろう。

ルソン大学(University of Luzon)は私立のカトリック系大学で、学生数は5000人位と聞いている。初めて訪れた時の印象は、元気でフレッシュな20歳前後の男女の学生多数が校内を闊歩していて、そんな風景を見ていると、大学はたとえ外国であってもどこも変わらない、何10年も前の自分の大学時代と何ら変わらないと実感した。



ルソン大学の日本語を学ぶ学生と共に

フィリピンでの大学新学期は6月に始まるために、私の今回の赴任は後期からということになる。来年の10月末までである。後期の授業は11月13日から始まった。新たに受講申し込みをした学生は20人程で、教務課の係の人が言うには、最終的に40人近く登録するかもしれないということであった。実際その通りであった。教室いっぱいに学生が詰めかけ、彼らの真剣な顔付を見ていると、ある意味ではついぞ日本では見かけなくなった光景である。私の担当は週3回(月、水、金曜日)で、午後2時から3時までの各1時間である。テキストは『みんなの日本語』(スリーエーネットワーク)を使うことにした。

日本語を学ぶ学生は、Business ManagementとHotel Managementを専攻する学生で、1年生から4年生までの混合クラスである。受講生は、大体18歳から21歳位の学生が中心であ

るが、中には27歳や31歳の女性がいたりして、彼女たちは大学院の学生かもしれない。また驚いたことには、40代の子供連れの学生もいて、毎回子供を連れて来ていた。留学生も一人いる。父親がスペイン人、母親がフィリピン人という女子学生で、Hotel Managementを学んでいる。男女の割合は、男子学生が5人で、あと30数名は女子学生である。ここでも外国語を学ぼうとするのは圧倒的に女子が多

い。それは日本でも事情は同じである。

12月はクリスマスの時期のために授業も予定表では23日が最終日となっていたが、実際は18日が最後の授業で、あとは1月3日までクリスマス休暇で休みである。最後の18日はまだたくさんの学生が来るものと思っていたら2人しか来なかった。こうなると1月4日もあまり来ないものと予想される。

こんな風にしてあっと言う間に1か月は過ぎてしまった。これからクリスマスや正月の長い休暇をどう過ごすかと悩んでいる。幸いにして、授業のアシスタントをしているフィリピン人が家に招待してくれることになり、大いに楽しみである。またいくつかパーティや教会のクリスマス礼拝などにも招かれていて、フィリピンの生の生活を体験できそうである。それ以外にも4～5日の旅行も計画中である。



クリスマス休暇でほとんど学生の姿が見えないキャンパス



ひらがなをホワイトボードに書いている学生



恒例! 'わんりい' 新年会

2016 'わんりい' 新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう

場所：麻生市民館・料理室 (小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2016年2月7日(日) 11:00 ~ 14:00

- 定員：先着40名 ('わんりい' 会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費：1500円 (会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込：メール：wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX：042-734-5100

◇わんりいの催し

留学生たちとチゲ鍋を囲んで交流しよう会

アジア諸国から日本を選んで留学中の皆さんは、勉学に励むかたわら新鮮な眼差しで日本を見つめ、学校やアルバイト体験を通して日本への理解を深めています。寒い季節、体も心もほっこり温かくなるチゲ鍋を一緒につつきながら、私たちが留学生の皆さんたちの気持ちや体験を伺ったり、お国や家族の話話を話して頂いたり等、楽しく交流する機会にしましょう。

- 場所：まちだ中央公民館6F・調理実習室
- 月日：2016年1月17日(日) ● 時間：11:30 ~ 14:30(予定)
- 会費：1500円(会場費・材料代など、留学生は無料です)
- 定員：先着15名(留学生を除く)
- ◆ 申込み：☎042-734-5100(わんりい) E-mail:wani@jcom.home.ne.jp



◇わんりいの催し

ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう!!

- ▲1月の講座：26日(火) まちだ中央公民館・視聴覚室
- ▲時間 10:00~11:30
- ★動きやすい服装でご参加ください
- 1月の練習曲「庭の千草」
- 講師：Emme(歌手)
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名(原則として)
- ◆ 申込み：☎042-735-7187(鈴木) E-mail:wani@jcom.home.ne.jp(わんりい)



◇わんりいの催し

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

- ▲1月の講座：17日(日) ▲2月の講座：21日(日)
- ▲場所：まちだ中央公民館 第3・4学習室
- ▲時間：10:00 ~ 11:30
- ▲講師：植田渥雄先生 (現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：20名(原則として)
- * 録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ 申込み：☎090-1425-0472(寺西) E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)



初心者のための水墨画教室

【鶴川水墨画教室】体験のお誘い

生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。季節に応じて身近な風物を描ける楽しさを味わえます。

- 講師：満柏(日中水墨協会会長)
- 場所：市民センター(駐車場有) 〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4
- 曜日・時間：毎月第2、第4(月) 14:00 ~ 16:00
- 体験参加費：1000円 見学：無料
- 問合せ：野島 ☎042-735-6135



'わんりい' は、いつでも新入会を歓迎しています。

年会費(4月~3月)：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 'わんりい'
入会時期によって割り引きあり。お問合せ：下記。

- ①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。
- ②'わんりい'の活動の全てに参加できます。
- 問合せ：042-734-5100(事務局)
- ◆ インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい'わんりい'をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆ 'わんりい'のおたよりは、町田各所でご自由に取り扱います。上記へお問い合わせください。

【東京中国文化センターの催し】

第一回日中写真交流協会企画展
「美しい中国・美しい日本」

日中の写真家たちが両国の交流と相互理解への願いを込めて撮影の写真展です。'わんりい' にイラストを頂いている満柏画伯撮影の写真も、3点出品されます。

会場：東京中国文化センター（入場無料）<http://tokyocccweb.org/jp/whzjs/zxzd/index.shtml>

2016年1月7日(木)～1月15日(金)(1月9～11日休館)
10:30～17:30(初日15:30～、最終日13:00まで)
105-0001 港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F 銀座線虎ノ門駅2番出口・徒歩7分
主催：日中写真交流協会・東京中国文化センター



出品者：周剣生

桜美林大学孔子学院

第3回漢詩朗読・創作発表大会

2016年1月30日(土) 13:00～17:00
桜美林大学淵野辺キャンパス2階 202教室

●漢詩講演会：13:00～14:00

講演者 石川忠久氏

(斯文会理事長、全国漢文教育学会会長)

テーマ「李白 人と詩」

●朗読・創作発表大会 14:15～17:00

▲朗読の部 (中国語で朗読。創作でないものに限る)

五言絶句3首、七言絶句2首、七言律詩1首など

▲創作の部 (日本語使用可。十八韻の使用が望ましい)

五言絶句、七言絶句、七言律詩からいずれか1首を創作し創作者が中国語もしくは日本語で発表。

※どちらの部もバックミュージック使用可 (CD各自用意)

※詳細はお問合せください。

～表彰:最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞など～

●申込：2016年1月22日(金)まで(必着)にメール、Faxまたは郵送で①～⑦を記入し下記へ申し込む

①第三回漢詩朗読・創作発表大会参加申込書②名前(振り仮名をつける)③〒&住所④電話番号⑤メルアド⑥生年月日&満年齢⑦所属

※終了後、懇親会あり。(希望者のみ・会費3000円)

桜美林大学孔子学院事務局 第3回漢詩朗読・創作発表大会担当者宛

〒252-0206 相模原市中央区淵野辺4-16-1

☎042-704-7020 FAX:042-704-7024

E-Mail:kongzi@obirin.ac.jp

【2016年1月と2月の定例会/3月号おたより発送】

●場所：三輪センター・第三会議室

●1月定例会：1月19日(火) 13:30～

●2月定例会：2月16日(火) 13:30～

●3月号発送日:2月29日(月) 10:30～

※お弁当持参ください

※2月は例年通りおたよりの発送はありません。

◆問合せ：☎042-734-5100(わんりい)

【生涯学習センター・国際交流センター共催】

外国の踊りと演奏とお話と
～外国人から見た町田～

2月6日(土) 13:30～16:30

町田生涯学習センター 7Fホール

<http://www.city.machida.tokyo.jp/shisei/shiyakusyo/gyomu/kyouiku/syougai/syougai05.html>

楽しい異文化体験をしながら、日本に暮らしている外国人の皆さんの思いや感じていることを聞いてみましょう。

【第一部】馬頭琴演奏/バンブーダンス/カンボジアの踊り

【第二部】外国人によるパネルディスカッション

●申し込み：1月21日(木)正午から、イベントダイヤル

☎042-724-5656で受付いたします。

◆問い合わせ：生涯学習センター TEL042-728-0071

2016年が、皆様にとって良い年でありますようお願いいたします。 'わんりい'

'わんりい' 210号の主な目次

北京雑感100 北京の冬	2
論語断片(13)君子は憂えず懼れず	3
媛媛讲故事(81)「労山道士」	4
諺・慣用句(46)「大義名分」	6
元寇と鷹島(4)	8
詩人尹世霖の童詩の世界(19)「小さい孔雀」	10
活動報告「Emmeオープンボイスコンサート参加」	11
活動報告「町田市市民協働フェスティバル まちカフェ! 参加」	11
鄧さんの観光ガイド(8)「応県木塔」	12
東西文明の比較(1)	14
スークーニャン 四姑娘山の太川さんから年賀状	16
スリランカ紀行(5)「シーギリヤ・ファンタジー」	17
フィリピン滞在記(10)パンガシナン州ダグーパン市へ移動	19
'わんりい' 掲示板	21・22